

現地説明会資料

ろくたんがまる

六反ヶ丸遺跡

平成30年11月10日(土)

(公財)鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



◇ 六反ヶ丸遺跡について

六反ヶ丸遺跡は、出水市六月田町六月田下にあり、米ノ津川の右岸に広がる水田地帯より、わずかに小高い標高約6mの微高地に位置しています。南九州西回り自動車道建設に伴い、平成29年度から発掘調査を行っています。

昨年度の調査では、古墳時代(約1,700年前)の竪穴住居跡や埋設土器などが見つかり、当時のくらしぶりを伝える遺構・遺物が発見されました。



◇ 今年度の調査成果

◆ 古墳時代(約1,700年前～)

古墳時代の遺構・遺物は遺跡全体で確認され、現在までに竪穴住居跡7軒を確認しました。これから調査する部分にもさらに数軒存在すると想定されます。いずれも弥生時代の終わりから古墳時代の中頃までのものと考えられ、住居跡の床面からは多くの甕や壺、高坏などが出土しました。また、焼土を伴う土坑や土器の集中域も見つかっています。さらに、県内では出土例の少ない小形仿製鏡(ぼうせいきょう)も見つかり、貴重な発見となりました。



◆ 古代(約1,200年前～)

古代の遺構・遺物は、遺跡の東側調査区を中心に確認されました。主な遺構は、土器焼成土坑、掘立柱建物跡、礫敷遺構などです。これに伴い土師器や須恵器の甕や壺、坏、皿などが見つかり、土器焼成土坑は、古代の人々が土器を焼いた跡で、県内では発見例が少なく、当時の土器生産の様子がうかがえます。また、礫敷遺構は下層の豊富な自然礫を工夫しながら敷きつめたと考えられ、古代官道の一部であった可能性もあり注目されます。



◆ 中世～近現代(900年前～現在)

中世の遺構・遺物は、カマド跡2基や土師器、陶器、羽口などが調査区の一部で見つかり、近世のものとしては、掘立柱建物跡5棟、土坑が青銅製鈴を埋納したもの1基、甕を埋めたもの2基を含み合計8基ほどが見かっています。また、調査区東端に石組遺構があります。これは、近年まで「ウッガンサー」と呼ばれ、信仰の対象として大事に守られてきた場所ですが、その起源がいつ頃までさかのぼるのか、現在調査中です。

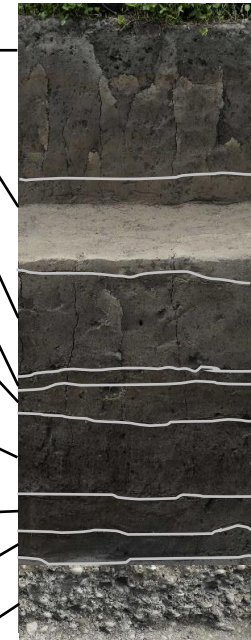


六反ヶ丸遺跡の基本層序

六反ヶ丸遺跡の基本層序は以下のようになりますが、場所により地層の残り具合に違いがあります。

礫敷遺構周辺には、遺物包含層が良好に残されていました。

I 層(表層)	
II a層(黄褐色土) ※古代・中世包含層	
II b層(灰黄褐色土) ※古代の包含層	
※礫敷遺構(古代)	
II c-1層(黄褐色土) ※古墳時代の包含層	
II c-2層(暗灰黄色土) ※古墳時代の包含層	
II c-3層(黄灰色土)	
II d層(灰褐色土)	
III a層(灰褐色砂礫土)	



■ は遺物包含層

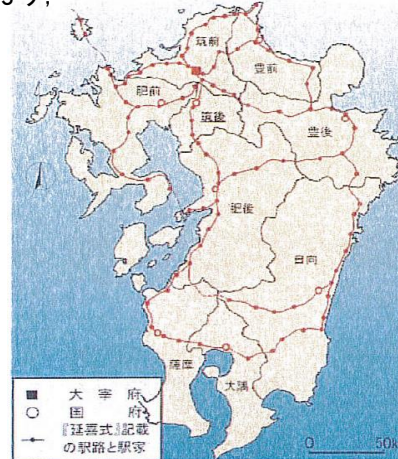
南九州の古代官道について

古代の道路は、人々の生活の中で形成された「自然道路」と、律令国家の成立に伴い、中央政府と地方官庁との情報伝達をスムーズに行うための、中央集権的な国家体制によって建設された「計画道路」(官道)とに分けられます。

この計画道路(現在の高速道路網のようなもの)は、「駅路(えきろ)」と呼ばれ、多くの物や人が行き来する道路として整備され、軍事用道路でもありました。30里(約16km)ごとに駅家(うまや:駅のような施設)を設置し、緊急連絡用の早馬(駅馬)が常備され、直線的に造られたようです。

九州の駅路は「西海道」と呼ばれ、太宰府を中心に各国府を結ぶ道路網が整備され、『延喜式』には、水俣―市来(いちく:出水市武本付近説あり)―英祢(あくね)などの駅名が記されており、六反ヶ丸遺跡は、水俣と市来を結ぶルート上に位置する可能性があります。

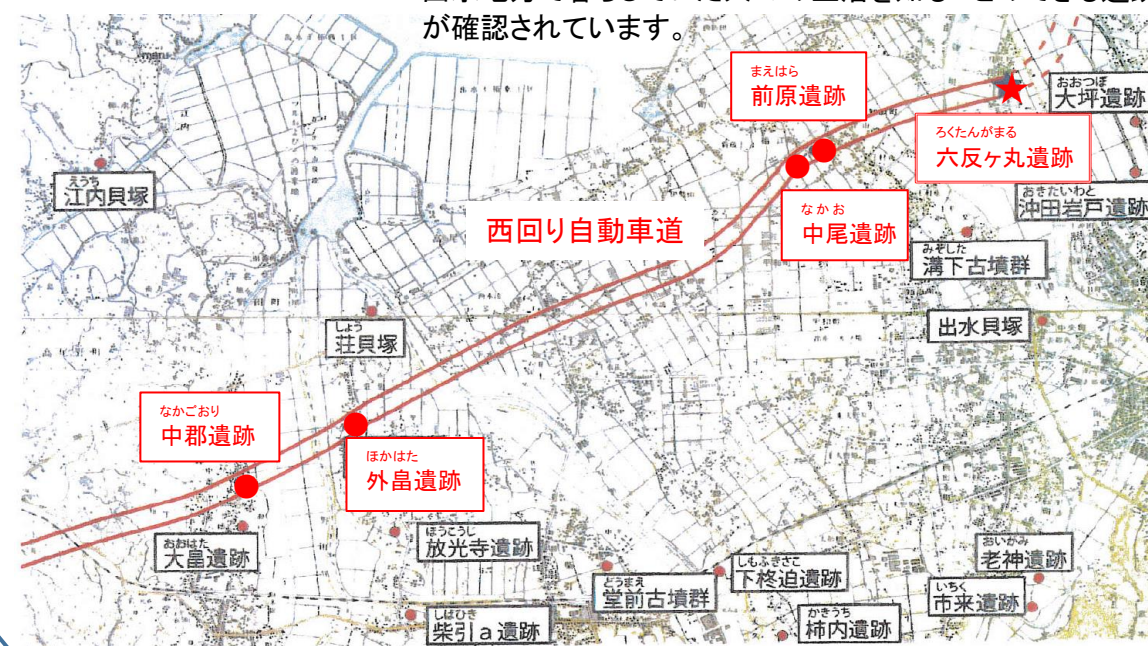
近年、始良市城ヶ崎遺跡で薩摩国府と大隅国府を結ぶ古代の官道跡が発掘調査されており、近い将来、南九州の駅路の全貌が明らかになる日が来るかもしれません。



図出典: 久留米市教育委員会『歴史散歩 No. 7』 西海道路線

出水市内の主な遺跡

六反ヶ丸遺跡の周辺には、米ノ津川の左岸に前原遺跡・中尾遺跡、右岸に沖田岩戸遺跡・大坪遺跡などがあり、出水地方で暮らしていた人々の生活を知ることのできる遺跡が確認されています。



●赤字は西回り関係遺跡

